

[講演要旨]

墓石の増減で判明した元禄地震津波被害

金子浩之(伊東市教育委員会)

§1. はじめに

元禄16年11月23日未明の関東地震は津波による激しい災害であった。伊東市域の津波による死者数は供養塔銘などで概数が把握されていたが、墓石の悉皆調査によってさらに詳細が判明し、災害史上への位置付も可能になった。

近世墓石は考古学分野からの研究が先行したが、そこでは墓石の形態変遷史が主眼となり、歴史史料としての位置付には難がある。そこで、墓石銘の年月日と戒名に注目して1年ごとの造立数を追跡して近世村落を襲った災害の実態を捉える史料とした。

§2. 墓石調査の結果

調査は静岡県伊東市域の近世期の墓石を対象に一基ごとのカード化方式で実施した。近世には16箇村が市域に展開し、18世紀前期の推計人口は7,500人前後だが、計81箇所の墓地に合計13,371基の近世墓石が残っていた。このうち203基の墓石が元禄地震津波による犠牲者の墓であることが判明し、全体を1年単位でグラフ化したのが図1である。

墓石建立は17世紀の間は増加傾向を示す。これは村落内の墓石を建立できる階層が18世紀初頭までに出揃う結果とみられる。その後は個人墓だが、19世紀前半には一本の墓石に複数の戒名を刻む例が増え、やがて近代期には〇〇家之墓とするものが増加する。戒名と年月日銘を頼りに1年ごとの死亡者数

の分布を追うと、元禄地震津波や天明・天保両飢饉による死亡者数が平年死者数に比べて激増している特異な災害発生年があることが判明する。

伊東市域における元禄地震津波による死者数は村ごとに建立された共同供養塔計四基の銘文から特に激しい被害をこうむった宇佐美村=380余人、和田村=163人、川奈村=200余人の計743人の犠牲者数が既に判明していたが、これに加えて他の沿岸村落と山間村落からも数人から十数人ほどの犠牲者があったことが判明した。墓石銘に「元禄16年11月23日」の日付がある場合は間違いなく地震と津波による犠牲者である。よって、津波供養塔は百人規模の激しい被害を受けた村が建立したものであり、供養塔の造立まで至らなかった村々の被害者は含まれず、約40名の犠牲者を墓石から新たに把握した。

§3. 文献史料との整合性

墓石には戒名が刻まれて俗名や年齢などは判明しない例が多いが、中には古文書史料との間で見事に死に至る経緯と墓石銘とが一致した例もある。

また、津波の犠牲者は女性や子どもなどの体力的弱者に集中する傾向も戒名の解読から判明した。

災害の犠牲者は国内各地に散在しているはずだが、その詳細は史料の不足から実像に迫り得ない例も多い。徹底した墓石調査の実施により各地の災害に迫る史料として活用できる近世墓石調査の実施を勧めたい。

【図1】年代別墓石数の推移

